

遙かなり、アコンカグア(アンデス山脈) 6,962m

2002年12月～2003年1月 with Pancho



(登山口のオルコネス湖から仰ぐアコンカグア峰)

地球のほぼ真裏に当たるアコンカグアは遙か彼方の山であった。USA 経由で 30 数時間、途中乗り換え 3 回、エコノミークラス症候群になりながら、やっと辿り着いた登山基地の町メンドーサは真冬の日本と逆転の真夏の盛り。

周到な高度順化にもかかわらず、5,400m で高度障害が現れて残念ながら登頂は断念せざるを得なかったが、それなりに充実した 1 ケ月の山旅であった。

ヨーロッパアルプスが 1,200km ほどの長さに対して、アンデス山脈は南米大陸北端のベネズエラから南端のパタゴニアまで延々 9,000km に及ぶ南米大陸の背骨である。チリのサンティアゴからアルゼンチンのメンドーサに飛ぶ飛行機はこのアンデスを横断するが、飛行機から見下ろすアンデスは一面の茫洋たる山並みの連続であった。

その広さをどう表現したら良いだろうか。

入山点のオルコネス渓谷入り口からアコンカグア BC

であるプラサ・デ・ムーラスまで、一木一草も無い 36km の広大な灼熱砂漠、BC から上の山嶺は 6km の寒風吹きすさぶ岩山である。冒頭の写真の雪を被った山がアコンカグア山頂であるが、ここオルコネス湖との比高差が 3,500m 以上ありながら、ほんの丘ぐらいにしか見えないのは距離が遠いからである。広大なオルコネス渓谷も、歩 30 分と睨んだ目標物まで 2 時間もかかった。凡そ日本の山とはその尺度が違って、すぐ目の前に見える山が、例えば劔岳から乗鞍岳ぐらいまでの距離があろう。小さな端尾根でも優に丹沢山塊ぐらいはあろうか。アコンカグアにしてこの様な大きさだが、そのアコンカグアは広大なアンデス山脈からみれば、ほんの一点にしか過ぎない。

アンデス山脈にいくつのピークがあるのか知らないが、全般的に見るとアプローチなどというものが全く存在しない荒涼たる“悪魔の庭”であり、“神々の庭”であるから、現代の人が足跡を記していない峰々は数限りなくあるであろうと思われる。アコンカグア峰の稜線の一角から、重畳としたアルゼン



チン・チリ国境のアンデス山脈の連なりを見てこの感を一層深くしたのであった。(かつて、インカ文明が栄えていた頃は、或いは全ての峰々に祭祀の跡を記していたかも知れないが・・・後述の Secor の本にはアンデスの峰々には古代インカ人の足跡と思われるふしがあり、ピラミッド・ピーク 6902m の南東稜では祭祀されたミイラが発見されたと書かれている)。



(重畳としたアンデス山脈の連なり。手前はキャンプ・ベルリン)

さて。

新潟県の海谷山塊に登らんとして、その記事が載っていた雑誌『山溪』を見ていたパンチョがたまたま同じ号に掲載されていたアコンカグアの案内記事を読んで、“海谷山塊”が“アコンカグア”に変わってしまったのが、そもそもの発端であった。登攀グレードが特に高いという訳ではないが、海外登山でもかなり重い部類に属するアコンカグアを、この程度のきっかけで計画するのは安直の誹りを免れないかも知れないが、二人とも還暦を迎えた好機でもあり、後は野となれ山となれで決行した次第であった。ツアーなら簡単であるが、経費を安くする為と、自分のペースで登りたいこと、また帰途にあちこち立ち寄りしたいことから、個人手配にした。

まずは格安航空券を押さえねばならんと新宿の HIS に行く。アルゼンチンやチリへの直行便は無いから USA 経由になるが、情報では USA から南米までは超格安の航空券があるらしい。早速アメリカに赴任している友人にメールを打って頼んでみたが、丁度時期がアメリカに働きに来ているヒスパニックのクリスマス休暇の帰郷と重なっているようで sold out とのことであった。成田～NY は格安を探せば往復 4 万円ぐらい、NY～Mendoza 往復はこの USA 発売の航空券なら 500 ドルであるから、往復 10 万円程度で行ける勘定になるが、売り切れでは致し方が無い。HIS で 22 万円の切符を買った。パスポートにスタンプを増やすのが趣味のパンチョの希望で、シカゴ、マイアミ、サンティアゴ経由となる。

次は、文献だ。邦文のものはない。インターネットで検索して英書を探し、アメリカの The Mountaineers 社から出ている R. J. Secor “ACONCAGUA— a climbing guide” と英国の Cordee 社発行の 5 万分の 1 の地図を Amazon. com に注文した。

メンドーサの宿は、『地球の歩き方』に載っていた増田農場(民宿アコンカグア)にメールして予約。帰途立ち寄るペルーのリマもメールで予約した。同じく帰途 3 日間ほど遊ぶ予定の NY は JTB でマンハッタンのど真ん中の The New Yorker Hotel を予約。

これで大枠は決まったが、さて、問題は登山計画である。何しろ、海外登山なるものは生れて初めてだ。小生もパンチョも海外の高所経験は乗り物で登った 4000m 余の“丘”ぐらいしかない。日本の山でも富士山には未だ登ったことがない。

インターネットで内外のアコンカグアに関する情報を集めた。結構、紀行文や情報があるものだ。計画を作るに当たって一番物の役にたったのは、やはり現地のホームページであった。ルート、キャンプサイト、高山病対策、装備、気象、シーズン、登山前の準備などやはり現地ならではの情報が多い。

こちとらは、還暦を過ぎた老骨であるから、特に高所順応には十分な時間を取れるような計画にしてみた。その結果通常は山中 2 週間程度の行程が 3 週間くらいになったが、“サンデー毎日”の我々には急ぐ必要も無い。どうせなら、リマでインカの遺物も見たいし、NY のグラウンド・ゼロ(2001 年の同時多発テロで旅客機 2 機に体当たりされて崩壊した World Trade Center 跡)がどうなっているかも見たかったので、全行程 33 日間の旅となった。

日本での調達にはフリードライ 120 食分と若干の装備補充。燃料は 6000m の高度ではガスは低温で役

立たないであろうと、ガソリンを現地調達することにして 20 年前に使ったまま押し入れの奥に眠っていたガソリンバーナの PHOEBUS を引っ張り出した(これは結果的には失敗の巻であった。現地で調達した“ガソリン”という代物は“ベンジン”で異常に臭いが強いし、20 年間放置していたバーナは空気ポンプの調子が悪く、結局は現地で買ったガスが一番だった)。

高山病薬のダイアモックスは知り合いの鶴見大学の野口先生に分けて貰った。序に心不全用のミオコールスプレーも頂いた。野口先生は麻酔医学の専門家であるが、高山医学にも詳しく、普通のタクティックスは折れ線グラフ方式(高所と低所を往復して高度順応しながら高度を徐々に上げて行く登り方)であるが、年をとって体力が無くなってくると、この方式では 2 倍以上の獲得高度を登らねばならず、それだけ余分の疲労が溜まるから、ゆっくりでよいから右肩上がり方式(一日に登る高度を少なくして、その代わりに上下はしない)の方が良いとアドバイスして下さった。早速このご教示に従って行程計画を修正。

前日、成田近くのパンチョ邸で装備を点検し、12月15日成田をUA機で出発。荷物は、大型ザックとダッフルバッグ、入りきらない物は機内持ち込みのアタックザックに入れた。パンチョは背負子と、小生が昔使っていた博物館行きのキスリング、ザックは機内持ち込み。途中シカゴで transfer、同じくUA機でマイアミへ。ここで Lan Chile 航空に乗り換えてチリのサンティアゴ経由でアルゼンチンのメンドーサ着。

パンチョが背負子に括り付けていたシュラフが紛失するという一件はあったが、成田から最終目的地のメンドーサまで through check にした荷物も無事到着して、増田さんが手配してくれていたウェルテル氏運転の迎いの車に乗り込む。たまたまサンティアゴの空港で一緒になった愛知県の春日井山岳会の 3 人パーティーと同乗で増田農場に入る。暑い。南半球は真夏である。増田農場はメンドーサの郊外にあって、緑が多い館であった。まだ荷馬車が歩いているのんびりした郊外。警備の為にいつも鍵がかけられている正門が開いて、ご主人の増田四郎・久子さんご夫妻、娘さんのスサーナさんが迎えてくれた。孫のパブロ君(もう一人の娘さんの子供)は空港に迎えに来てくれていた。

増田さんは 40 年前に葡萄栽培指導のために渡亜し、以後日亜親善、アコンカグア遭難救助などにご尽力されて、日本の外務大臣表彰も受けておられるアルゼンチンの名士である。パスタの歓迎昼食を御馳走になり、五合瓶くらいの大きさがあるビール(スペイン語では *cerveza*, セルベッサ)を頂く。“ANDES”という地元のビールで味も欧米ブランドと異なり日本人好みの味であった。以後、増田農場でも街でもこの *cerveza* “ANDES” 印に親しむことになる。



(荷馬車が通る増田農場付近。メンドーサ/セントロ・ベルメッホ界隈)

ここで、登山許可証の取得、現地調達の肉類やハム、ガソリンなどを調達しながら、3 日間ほど滞在した。ここは市街(セントロ)からは少し離れていて、増田さんの車や、バスで街に出掛け、夜は一杯飲んでから、タクシーでご帰館遊ばされたが、深夜に初めてタクシーに乗った時はマイッタ。セントロに

あるショッピングモールで車を拾い、行き先を告げたまでは良かったが、運転手君が連れて来てくれた場所はどれも様子が変わる。増田さんからは、増田農場の隣にメンドーサ唯一の神学校があり、運転手に“セミナリオ”といえはすぐ分かれると教えられていたのだが、どうも運転手君はこの神学校を知らなかったようで、全く別の教会に連れて行かれた。こちとらは地理もスペイン語もチンプンカンプンであるし、メンドーサ州というのは広さが日本ぐらいある。それに辺りは漆喰の闇でどうにもならない。

参ったナア、もう。迂闊な事に増田農場の所番地もメモしていない。運転手君も往生して地名を並べ始めたが、我々にはさっぱり解せぬ。そのうち“ベルメ・・・”と言った様な気がした。アッ、そうだ。増田農場は確かベルメ何とかという地名だったナ。日本語で「そうだ、そうだ、そこだ!!」と叫んで(運転手に日本語が分かる由もないが)、やっとの事で我が宿舎に辿り着いた。

それからは“centro Bermejo”(ベルメッホ中心街)と告げれば間違いなく宿舎に着くようになった。(因みにメンドーサでも首都のブエノスアイレスでも、アルゼンチンのタクシーはボったり、態と遠回りするようなことは全く無い)。

ORIGINAL PARA ANDINISTA

RECIBO Nº 39814

PARQUE PROVINCIAL ACONCAGUA
MENDOZA - ARGENTINA

MENDOZA Miércoles, 18 de Diciembre de 2002

RECIBI DEL SEÑOR OTSUKA TADAHIKO

NACIONALIDAD JAPON

LA SUMA DE PESOS / DOLARES ESTADOUNIDENSES **U\$S 200 DOSCIENTOS CON 00/100 CTVOS.**

Por el pago del arancel correspondiente al ingreso al PARQUE PROVINCIAL ACONCAGUA en concepto de **ASCENSO**

TEMPORADA ALTA
Válido del 15/12 al 31/01

Firma y Sello del Casero

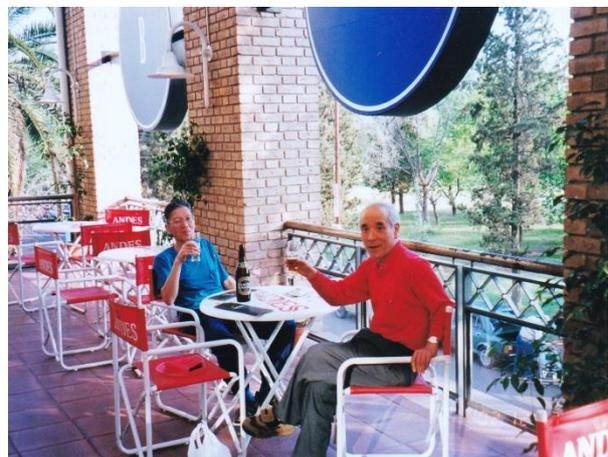
GOBIERNO DE MENDOZA

DIRECCIÓN DE RECURSOS NATURALES RENOVABLES

El horario de ingreso al Parque Aconcagua es de 8:00 a.m. a 6:00 p.m. Es obligatorio contar servicio de buñós. Está prohibido el ingreso con Climbers must hire o bathroom services. Climbers oren fouliduen to enter with bicycles into the Park.



(ベルメッホの立ち呑みバル)



(セントロ・メンドーサのバルでセルベッサを)

12月19日早暁、増田さんに見送られてアコンカグアへ出発。一路パンアメリカンハイウェイをチリ国境に向けて走る。このパンアメリカンハイウェイは、南北両アメリカ大陸を縦断して、南米ではベネズエラから太平洋岸沿いに南下し、チリのサンティアゴからアルゼンチンのブエノスアイレスに至る長大な幹線道路であって、大型トレーラの行き来が激しい(車輪が6軸もある超大型コンテナ車を牽引して飛ばしている)。

道路はチリ国境のアンデスから流れ出すラス・クエバス川に沿って、山中に入って行く。周りの山は岩と泥の禿山ばかりで、若干の灌木を除いて緑は全くない。川の水は赤茶けた泥水で、まさにこういうのを red river というのであろうか。途中には軍関係の宿舎とリゾートホテルが少しあるだけで、町な

どというものは無く、広大な砂漠のような谷間をハイウェイが一本うねっているだけである。鉄道も道路と平行してチリまで延びているが、チリ側の治安が悪かった時期に廃線になったそうである。軌道敷にはペンペン草が生い茂り、錆びたレールが放置されていて「強者どもが夢の跡」であった。

途中で国境警備隊(Gendarmeria)の検問に引っ掛ったりして1時間ばかり足止めをくったが、メンドーサから6時間ほどでラバ屋やスキー場などがある登山基地の集落 Puente del Inca(インカ橋の意)に到着、ラバ屋にBCまで荷上げして貰う荷物を預ける。ラバ1頭分60kg、US\$100.00(アルゼンチンは通貨はペソであるが、表記は米ドルと同じ“\$”であるからややこしい)。

ここには、川の兩岸からせり出してきた石灰岩が空中で繋がって出来た珍しい橋があり、地名の由来にもなっているが、観光名所でもある。しかし 何様山奥だから石灰岩を彫刻した置物を僅かばかり並べた土産物屋の掘っ建て小屋が2軒ほどあるきりであった。温泉も湧いていて、ローマ風の石造りの浴場もあるが、誰も入っていない。



(ラバ屋、ロス・プキオスのオヤジと)



(インカ橋。下の石造りの建物は温泉浴場)

ここから更に4km程国境側に車で進み、“Parque Provincial Aconcagua”(アコンカグア州立公園)の標識がある所から、いよいよアコンカグアの懐・オルコネス溪谷に足を踏み入れた。チリ国境まで僅か20kmという地点である。ここにはレンジャー・ステーションがあり、登山許可証を出して入山登録をする。レンジャーは下山時に下山登録をするまで、「何の何兵衛は只今現在入山中なり」と認識している仕組みになっている。

ラバに預けた荷物60kg以外に、BCまでの3泊分の衣食住25kgが入ったザックはずっしりと肩に食い込む。本当は○ビの半ダースでも隠し持たなかったのであるが、入りきらなかった。暫くは湿地帯で泥濘状だ。やがてオルコネス湖。湖というより“水溜まり”にちかく、“Laguna de Horcones”という看板がなければ見落としそうな小池であるが、谷の正面奥にアコンカグアが白く浮かんでいて、逆さアコンカグアも写っていた(冒頭の写真)。

アコンカグアはすぐそこにあるように見えるが、ここからアコンカグア山頂までは直線距離で20km、登山道沿いで40kmもあり、高度差は4,000mもある。日本の山とは全てにおいてスケールが違うから、目測が狂ってしまう。

未知の海外の山への期待で胸が踊るが、こんな一木一草もない不毛の地で3週間も過ごすのかと思うと、些かうんざりしないでもない。それに克服すべき高山病の心配もある。この辺りの昼間は灼熱地獄でもある。

赤茶けた泥水が流れる広大なオルコネス溪谷を縫う様にして、歩きにくい砂とゴロタ石の灼熱の道を半日ばかり歩いて山中最初の幕営地であるコンフルエンシア・キャンプに着いた。標高も既に3,400mあるから、足で登る高度としては我々には未知の領域であった。途中すっかりバテ気味になり、パンチョの足取りもフラフラの態で、早くも高度障害か?と平地を探して幕営しようかと物色していたら、通

り掛かった外人が、もう 30 分程でコンフルエンシアですよと教えてくれた。

コンフルエンシアとは合流点という意味であるが、文字どおりアコンカグア峰西壁とクエルノ山南壁の氷河から流れ出る大オルコネス溪谷と、アコンカグア南壁から落ちる小オルコネス溪谷の両谷が合流している地点である。狭い河岸段丘にレンジャーステーションとツーリストのテントが幾つかくつつくように並んでいる。やっと空き地を見つけて幕営。パンチョは咳込みが激しい。小生はバテてはいるが、高度障害の兆しは無いからとセルベッサを飲む。1 缶 10 ペソ。街では 1 ペソしないから、10 倍の値段である。日本では町と山小屋での値段差は 2 倍くらいであるから、随分高いように思えるが、値段自体は日本の山と大同小異。ただ、アルゼンチンでは 10 ペソといえば、庶民の半日分の給料に相当するから、やはり高いというべきだろう。(1 ドル=約 3.3 ペソ、1 ペソ=約 40 円)。

余談であるが、外国旅行では、物価をいちいち邦貨に換算して彼我の値段の高低を比較するのは良くない。その国の他の物価と比べてみると、大袈裟であるがその国の経済状態が分かり、その国にも早く馴染めるといふものである。ペソならペソ同志で諸物価を比較するのである。

翌日は高度順応のために、コンフルエンシアに滞在。Old Confluencia Campsite を見に行く。ここは(上の BC でも)環境保護のために、定期的にキャンプサイトの場所を替えているそうで、今はここ new site に移っているが、old site はモレーンを越えた一つ向こうの谷にあって、そちらの方が幕営には適地であろう。眺めも良く、緑の草地もあった。

BC から下ってきたミューラ(ラバ)の隊列はこのモレーンの丘から現れるが、急な石ころだらけの斜面を駆け降りるラバの姿は勇壮である。ラバはロバと馬を掛け合わせたものだそうだが、山道を登下降するのに適しているらしい。馬よりやや小型であるが、馬力はあるようだ。それにおとなしそうでもある。



(荷揚げ中のラバ)

その翌日。アコンカグア南壁への道を右に分けて、いよいよ広大な大オルコネス溪谷の灼熱砂漠の河原に入っていく。2 時間ばかり歩くと「コロラドの大岩」(Piedra Grande Colorada)があって良いランドマークになっていた。日陰を得ようと裏側に廻ってみると、そこはキジ場。しかし強烈な太陽に焼かれてカラカラに乾いているから臭いはしない。この辺りから上は、今まで地面にへばりつく様に生えていたトゲのある草も全く無くなって、一木一草も無い砂漠である。従って日陰も無いから暑い事この上ないが、冷たい山風が吹き下ろしてくれば一気に肌寒くなったりもする。

今まではアコンカグア山頂から南に伸びる支尾根の陰になって見えなかった氷河を抱いたアコンカグアの南壁が岩山の向こうに再び姿を現した。この辺りは高度も富士山頂に近い。この広大な谷は比較的緩やかな地形のせいもあって、幾ら歩いても前に進んだ気がしない。気が遠くなってくる。まさに“バカ谷”である。



(広大なバカ谷、オルコネス溪谷)

パンチョは今日中に BC まで入ろうと言うが、小生はバテ気味であるし、高度順応もしなければならぬ。予定では今日の泊まりはイバネス(3960m)であるが、そこより大分下の大岩の陰に幕営する。高度計は 3,660m を指している。水は真っ赤な泥水しかない。折よく一緒になったアメリカ人から浄水器を借りることができたが、これがまた時間がかかる代物であった。現地調達の手とタマネギの炒めものを作るが、肝腎の胡椒と塩を目方の制限から割愛してきたので全く美味くない。セルベッサも無いの

で早々に寝るが、夜半目が覚めて呼吸が苦しく動悸もする。やはり早くも高度障害が出てきたか？



(再び見えてきたアコンカグア南壁)

今まで平坦だった川床の道が、ここからはモレーンに入って相当急になってきた。呼吸も苦しい。標高は富士山を越えている。5時間ほど掛かってやっとの思いでBCに辿り着いた。ここはノーマルルートのBCで“ラバの広場”(Plaza de Mulas)と呼ばれている標高4,300mの小盆地である。レンジャー、ドクターのテントやツーリスト、ラバ屋のテントが林立している賑やかな“街”である。正面には氷河を掛けたクエルノ山(5462m)が大きい。右手にはノーマルルートがアコンカグア稜線のコル(ニド・デ・コンドレス、コンドルの巣の意)に向かって延び、その右上には覆いかぶさるようなアコンカグア西壁が強烈な太陽を反射して輝いていた。

ラバ屋のロス・プキオス(Los Puquios、邦訳すれば「清流ツアーズ」か)のテントに預けた荷物を取りに行き、カマボコ型の居間兼食堂兼物置用テントと、各自の寝室用テント2張の計3張を張る。重いけれどテント3張を持参したのは、4,300mという環境の悪い高所で少しでも快適なベースを作りたかったからであり、特に寝室を各自のテントにしたのは、高所ではそうなくても高度障害でイライラしてお互いに喧嘩をするだろうからと配慮した結果であった。これは大成功であった。皆さんにも是非この方式を薦めたい。



(BCに張った我々の3張ノテント)

その夜は、飯を作るのも面倒だったから、ロス・プキオスのテントで外食にした。一応スープからデザート、コーヒーまでのフルコースである。メインディッシュは牛肉と鶏肉のチョイスもできる。15ドル。アルゼンチンの物価からすればサラリーマン3~4日分の給料に相当するから、相当高価な勘定になる。セルベッサも売っているが(3ドル)、これはタバコと共に高山病予防の為に横目で恨めしそうに眺めるだけにした。(因みにタバコは、驚くなかれ10ドル!! 下界でもアメリカタバコは7ドルはするから、超贅沢品である。因みにリマの横丁の路上では一本づつバラで売っていた)。

このテントは、英語も話す若くて可愛いセニョリータちゃんが仕切っていて、早速百円ショップで仕入れてきていたパンストと電卓を恭しく贈呈して情を通じた結果、以後色々と便宜を図って貰えた。アドリアーナ・ドミンゲスという(「情交」を通じたのではない。ソチラの方面はとっくの昔に卒業した。

後日談:2004 年暮れにここを訪れた知人の話では、アドリアーナはパンストは使っていないが、電卓は愛用しているとのことだった)。玉葱や卵を只で貰えたが、これは単調なフリーズドライばかりのテント食に花を添えてくれた。下界に置いてきた胡椒と塩もたっぷり頂いた。

BC に夕闇が降りる頃テントから出てみると、西のカテドラル山(5,335m)に沈む夕陽がアコンカグア西壁の上部だけを黄金色に染めていて何とも幻想的な光景である。当地は、昼夜の時間帯が日本とは2時間ばかりずれていて、日没は21時頃である。メンドーサの街でも夜が賑わうのは22時頃からである。



(黄金色に輝くアコンカグア峰西壁の残照。BCより)

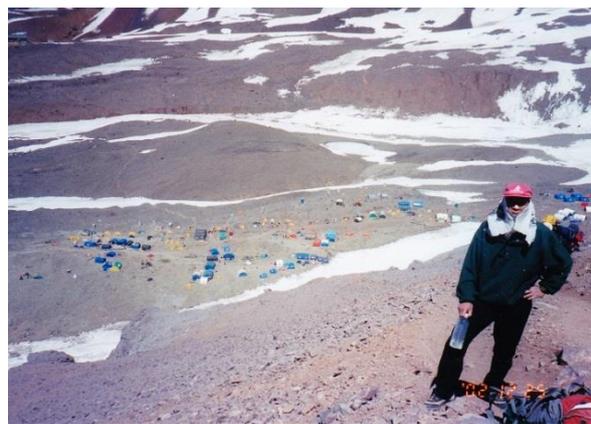
この頃から、小生も咳き込み症状が出始めた。パンチョは回復したようだ。持参したダイアモックスを恐る恐る1/4錠飲んでみた(通常は1回に1錠、1日に2回服用)。この薬は元々は眼球に溜まった余分な水分を排出させるための緑内障の治療薬であるが、高山病にも効く。利尿作用があるので1時おきにトイレに行きたくなるが、強風が吹いていてテントの外に出るのが億劫だから外張の内側に垂れ流す。

翌日はこのベースに滞在し、ドクターにパルスオキシメーターで動脈血酸素飽和度(SpO2)と脈拍を計ってもらったところ、SpO2は80、脈拍は91で正常の範囲だった。向かいのモレーンの上に建っているホテル・レフヒオ(Hotel Refugio)を見に行く。Hotelといっても山小屋である。途中にはペニテンテス(巨大な氷柱、大きくなると2mくらいに成長する)があって珍しい。

BCでは“Inka”というツアーリストのテントにノートパソコンが1台置いてあってメールサービスをしていたので、早速自宅にメールして、ESSの友人や都岳連の個人会員に転送して貰った。キーボードの配置がかなり違うので、ややこしい。ローマ字混じりの英語で打つのも難儀であるが、こんな人里離れた高山でメールが打てるとは知らなかった。便利な世の中だ。係のおニイさんに衛星経由かと聞いてみたら、メンドーサまで無線で送り、そこからインターネットに載せているのだそうだ。どうやら、おニイさんはメンドーサ大学工学部の学生でアルバイトに来ているらしい。1回10ドル。通常は上りだけのサービスであるが、そのおニイさんと親しくなって、返信が入っているよと教えてくれた。都岳連個人会員の赤沢さんからのものであった。こんなはるばる地球の裏側まで、英語で激励の返信をしてくれた山友達の赤沢さんに感謝する次第である。



(プラサ・デ・ムーラスのBC風景)



(キャンプ・カナダへの道からBCを鳥瞰)

翌日、再度今後の行程を練り直し、レンジャーに相談しに行く。やはり高度順応活動としての BC からニド・デ・コンドレス間、及びニド～キャンプ・ベルリン間の上り下りは必要であるが、これは最少限にし、ベルリンからはラッシュタクティクスで短時間でアタックした方が良さらしい。我々の当初計画では右肩上がり方式で、コンウェイ・ロック(4610m)、キャンプ・アラスカ(5150m)にそれぞれ一泊ずつしてニド(5350m)に至り、ここからもう一回 BC に降りて休養、再度キャンプ・ベルリン(5800m)まで荷揚げしてまた BC まで降りて、3 回目に頂上(6,962m)アタックというスケジュールであった。

レンジャーは我々の示した計画を根気よく修正してくれた。その結果、

第 1 日目・・・BC⇒Camp Canada(4900m)へ 1/2 荷揚げ⇒BC へ下降

第 2 日目・・・BC で休養

第 3 日目・・・BC⇒Canada へ残 1/2 荷揚げ、Canada(泊)

第 4 日目・・・Canada⇒Nido de Condores へ 1/2 荷揚げ⇒Canada へ下降

第 5 日目・・・Canada⇒Nido へ残 1/2 荷揚げ、Nido(泊)

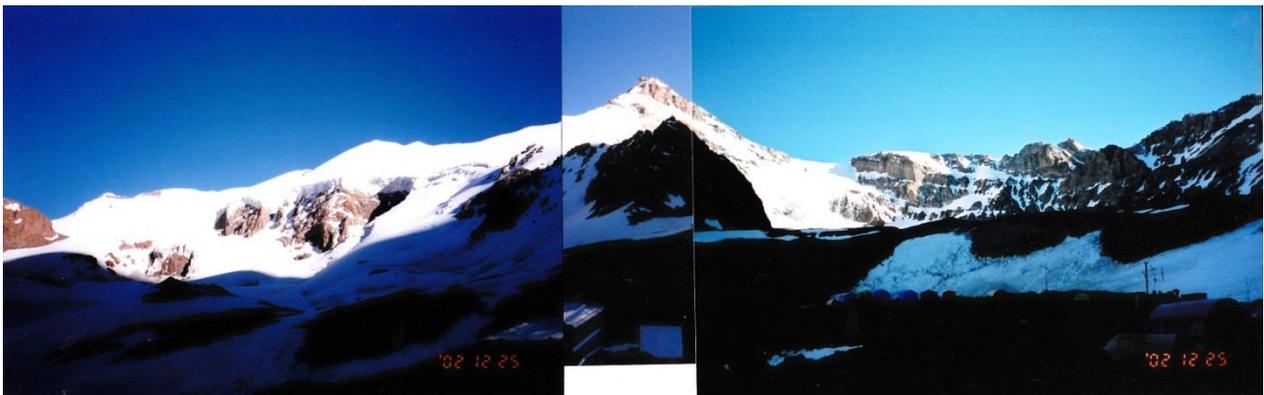
第 6 日目・・・Nido⇒Berlin へ 1/2 荷揚げ⇒Nido へ下降

第 7 日目・・・Nido⇒Camp Berlin(泊)

第 8 日目・・・Berlin から頂上アタック⇒Berlin(泊)

第 9 日目・・・Berlin⇒BC に下山

というスケジュールに相成った。登下降を繰り返しているのは高度順応のためと荷揚げのためである。この行程表では平均すると、一日当たりの累積獲得高度は 340m/day となり、Secor のガイドブックで推奨している一日あたり 300m を若干オーバーするが、まあよしとしよう。



(BC よりクエルノ山 5,462m の夜明け。左はオルコネス氷河、右の稜線はニド・デ・コンドレスへ続く稜線。

手前右側は未だ夜が明けていない BC)

さて。

C1 であるキャンプ・カナダへ荷揚げして一旦 BC まで下り、ドクターチェックを受けたところ、咳込みはあるが、SpO2 値は正常範囲であった。翌日一日休養して、翌々日 BC に張っていた個人テント 2 張りを撤収し、C1 へ向かう。C1 は BC の直ぐ上に見えている岩塔であるが、登っても登ってもこれがなかなか近づかない。気が遠くなってくる。息もゼイゼイしてくる。後ろから登ってくる外人にどんどん抜かされた。通常は C1 はニドに設けて、ここまでを BC からの 1 日行程とするから我々の行程は老骨向きであるが、それでも結構キツイ。高山病予防には水を大量に飲めというから休憩の度にガブ飲みするが、BC のドブ池で取水した水は変な臭いや雲古などの浮遊物が浮いていて、それ程飲めるものでもない。

やっとの思いでキャンプ・カナダに辿り着き、岩塔の陰にテントを張る。遥か下方に BC が小さく見え、その向こうにはカテドラル山(5,335m)からメキシコ山(5,083m)、トローサ山(5,432m)に連なるオルコネス谷右岸の岬々たる山巔が連なり、右に目を転ずればその南壁に大オルコネス氷河を抱いた真っ白なクエルノ山 5462m が端正なピラミッドを聳えさせている。ゴーと音が聞こえたから何事かと見れば、この氷河が崩壊して白煙とともに落下しているのであった。(この氷河は夕方に崩壊することが多いよ

うで、BCからもしょっちゅう目撃した)。



(BCからキャンプ・カナダへの道)



(キャンプ・カナダ)

何気なくテント脇の岩陰に目をやると、齢妙な外人女性がヒョイと尻をめくって用足しを始めた。恥ずかしがっている風は全く無い。BCから上のキャンプサイトにはトイレなどは無いから、その辺りの岩陰はキジだらけである。この汚物が下の雪渓に流れ込んでいるから、雪渓を溶かした飲料水も汚物だらけという寸法になる。ツアーではさすがに携帯トイレを荷揚げしているようだ。

夜半猛烈な風が吹き、テントがバタバタと悲鳴を上げ始めた。咳込みが激しくなる。ダイアモックスを1/2錠飲んでみるが、効果は無い。小便の回数が増えるだけであった(1/2にしたのは副作用を心配したからであるが、帰国後野口先生に聞いたところ、男性は1錠服用しないと効果はないとのことであった)。この強風で、パンチョの外張が吹き飛ばされた。

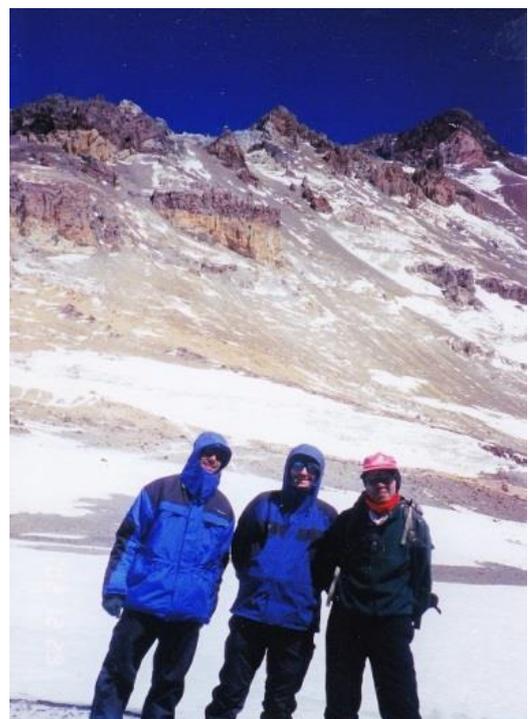
翌日は予定ではニドまで荷揚げしてキャンプ・カナダに降りて泊まる予定なりしも、この強風に意気喪失、午後からニドの手前まで空身で往復して高度順応としたが、空身でもきつかった。

次のキャンプ地(C2)であるニド(5,350m)にテントを進めたのは年の瀬も押し詰まった12月30日であった。ここはアコンカグア頂上からクエルノ山に落ちる稜線が鞍部となっている所で、広大なキャンプサイトとなっている(キャンプサイトといっても人工物は何も無い)。真ん中に凍った小池があり、その周りを砂礫の丘が囲んでいて、何となく心が落ち着く場所であった。コルの北端から北方の展望は、チリ国境のアンデスの山並みが重畳と重なっていて、壮大な眺めであった。山名は知らないが、切り立った雪の岩壁を垂直に落としている針峰もある。



(↑ニドに張ったテント)

(ニドの凍った小池、一緒になったアメリカ人と⇒)



我が高山病も、病膏盲に入ったのか、咳き込みが止まらなくなってきて、喘息の発作状態を呈してきた。横になると咳込みの発作が止まらない。身体を起こしていると多少はマシであるが、ウトウトして横臥すると、途端に咳込みが始まる(帰国後、野口先生にこの病状を報告したところ、この症状は肺水腫とのことで、リタアしていなかったら非常に厳しい状況になっていたであろうと言われた)。

これではどうにもならない。翌朝、私の咳に気付いた他のパーティーの現地ガイド氏が直ちに下山せよと勧告してくれた。残念であるが、ここ 5,400m で断念せざるを得ないことが自分でも分かる。パンチョには、せめてキャンプ・ベルリン迄でも単独で登って来てくれと高度計を腕から外して彼に渡した。できれば降りて来たパンチョと一緒に下山したいと待っていたが、病状がひどくなる一方なので、午後テントを撤収し、彼に置き手紙を残して BC 下る。

アコンカグア登頂の本領はここから上の部分にある。はるばる地球の裏側から出掛けて来たのにと残念であるが、致し方がない。

(余談であるが、高所では簡単な計算、例えば今日が 12 月 30 日で、明後日は何日になるかというような計算ができなくなる。また、更に余談になるが、ここでの高山病はかなり多くて、増田農場で一緒になったパーティーの若者はオルコネス谷を飛ばし過ぎたのか BC で発症、一晚ガモウバッグに入った後、ドクターの指示によりヘリでメンドーサの病院に搬送された。ヘリは下のオルコネス・レンジャーステーションに常駐している。また、登頂を果たした同じ隊の中年男性は、下山後昏睡で卒倒し入院、日本から家族を呼び寄せる結果になった。下山者に聞いてみると 8 割方の人が高山病や、強風で登頂を断念していた)。

キャンプ・カナダの辺りまで降りて来て上を見上げると、パンチョに似た男が両ストックに縋って空身でよろよろと降りてくるのではないか。我々はストックは使っていないからといぶかしんだが、やはり奴であった。聞けば、どこかのガイドかポーターが、お前は相当草臥れていて危険だから、荷物は俺が担いでやる、ストックを貸すから使えと言ってくれたらしい。なるほどガイド氏はザックを前と後に二つ背負っていた。奴はこれは“雲助ガイド”に違いないと疑心暗鬼であったが、そうではなく現地の人の全くの親切心からであったようだ。海外では泥棒や雲助に注意という警告が行き渡りすぎているが、人を疑ってはいけない。心すべきことである。疲れた身体には下りとはいえ、BC 迄の距離がウンザリするほど長かった。大晦日の 20 時、BC に帰着。彼のラバ屋のテントに顔を出す。セニョリータのアドリアーナが“Success?” ときた。“No, porque tengo puna mala.” (because of mountain sickness)。



(頂上からこのような景色を見るはずだったが・・・)

アコンカグア南峰・南壁の雪壁 現地パンフから引用)



(ラバ屋ロス・プキオスのセニョリータ、アドリアーナと)



(クエルノ山と大オルコネス氷河)

BCでも我が病状はさしたる回復を見せず、翌日の03年元旦は装備を整理したり、15日ぶりにシャワーを浴びたりして過ごした。15日間も風呂に入らないということは、学生時代の山行を除いては今まではなかった。最初は股の辺りが気持ちが悪かったが、そのうち気にならなくなった。高山病の症状が出てからは、それどころではなかった。

1月2日、テントを撤収しラバに荷物を託して空身同然のザックで出発点のオルコネス谷入り口を下る。往路は4日間かけて登って来た道を1日で下る。いくら下り一方とはいっても、長くて長くてウンザリする。それに、迎えの車が18時にレンジャーステーションに来る手筈になっているから、待たせては悪いと気ばかりが焦る。10時半にBCを出て、午後4時、やっとコンフルエンシアだ。バテバテでコンフルエンシア・キャンプの上の急坂が登り切れない。



(オルコネス溪谷のペニテンテスを下る)

ラバの隊列が走り登って行く。ラバは賢い動物でちゃんと人を避けてくれる。余談であるが、パンチョの研究によると、ラバはロバと馬の1世代限りのハイブリッドで、それ故ナニの楽しみが与えられていないので、愁いに沈んだ哀しげな目付きをしているのだそうだ。誠にお気の毒なことである。かような罪を作った人類こそインフェルノに墜ちるであろう。ア～ア、ラバに乗せてくれないかなア(後で聞いたらラバの背で下るサービスもあったが、これは慣れなければ股の皮膚が擦り切れたり、落ちそうになったりで相当に重労働だそうで、乗った人の話では乗らなければ良かったと言っていた)。

オルコネス湖に近い吊り橋が見えてきた。すぐその様に見えるが、山の尺度が大きいため、なかなか近づいてくれない。

迎えの約束時間を1時間超過して19時レンジャーステーション着。ウェルテルさんが待っていてくれた。握手して“Thanks so much for your waiting”。プエンテ・デル・インカのラバ屋ロス・プキオスでラバに預けた荷物をピックアップ、鍾乳石のインカ橋を見物した後、2週間を過ごしたアコンカグアに別れを告げて、真っ暗なパンアメリカンハイウェイを一路メンドーサに向けて走る。真夜中の1時に増田農場に帰着して、初めての海外登山「アコンカグアの山旅」を終わったのであった。

【お世話になったメンドーサの宿 増田農場点描】



(↑増田邸本宅 牧潤一氏画)



(今は民宿棟に使われている旧宅⇒)



(庭で洗濯をする)

(アコンカグア登山編 完)

以下は、山を降りてからのイグアスの滝見物、リマ、NYなどの漫遊記である。
興味の無い方は読み飛ばして下さい。

【続編・下界にて】

登頂を途中で断念したから、時間が1週間程余った。

アコンカグアの山中で出会った単独行のT君(群馬大医学部)の話では、彼はブエノスアイレスから夜行バスでメンドーサに入ったそうで、そのバスは座席がベッドになる超大型バスで“ディナー”もなかなかの物だったそうだ。この話を聞いて、我々も早速バスでブエノスアイレス見物に行くことにした。どうせなら序にイグアスの滝も見て来たらという増田さんのオススメがあり、スサーナさんにツアーリストに連れて行ってもらう。

ブエノスアイレス迄のバス、ブエノスアイレスからイグアス空港迄の航空券、イグアスでのホテルや現地のツアーリストの手配を依頼。夜行バス2泊、イグアスのホテルで2泊、縮めて1000ペソ。往復4,000kmの旅にしては、邦貨に換算すれば4万円程度であるから安いものであるが、上でも述べたように現地では2~3ヶ月分の給料に相当するから相当な高額である。

スサーナさんにメンドーサの長距離バスターミナルまで送って貰い、ブエノスアイレス行の夜行バスに乗る。2階の一番前の席を予約しておいたから、眺めが良い。片道1,100km、葡萄畑や牧場が点在する広大なパンパの中に付けられた一本道(これもパンアメリカンハイウェイ)を14時間かけてブエノスアイレスまで走る。外の景色は全く変わらない。3時間程で州境を通過。ここから先は対向車のライトの光が見えるだけで漆喰の闇夜となった。期待していた“ディナー”なる物はジュースとパンだけの代物であった。

翌朝到着したブエノスアイレスの街は、高層ビルが林立する大都会であるが、一步裏に廻ると貧民街の掘っ建て小屋が犇いていて、この国の貧しさが分かる。走っている車も、エンジンが丸出しであったり、ドアが吹っ飛んでいたり、よくもマア動くものだと感心するような超ポンコツ車が多い。

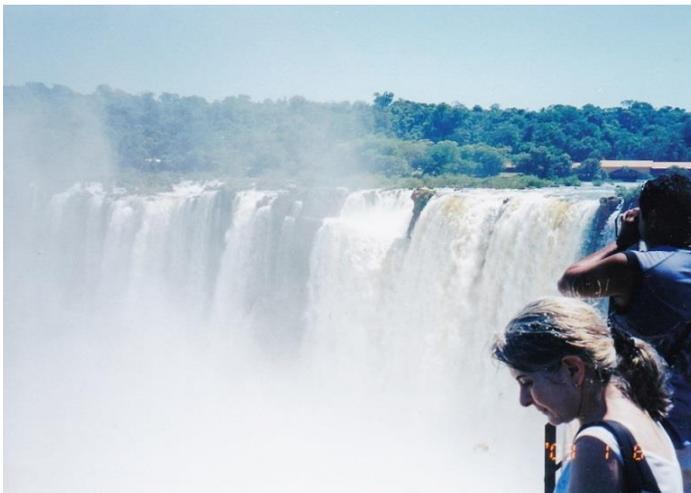
アルゼンチン航空でイグアス国際空港に飛ぶ。2時間。国際空港とはいえ、ジャングルの中に開いた田舎空港であるが、こざっぱりしていて感じが良かった。飛行機の中からは、水煙を上げているイグアスの滝が見えた。水煙は雲となって上昇していた。

空港からホテルまでの道は、ジャングルを切り開いた道で、所々に集落やホテルがあるが、どこも寂れていて、全くの廃屋になって錆びた鉄骨を晒している5階建てのホテルもあった。我々が投宿したホテルも半分くらい壊れかけた建物であったが、プールもあり、観光客も結構宿泊していた。

翌日、ツーリストの迎いのバスでイグアスの滝見物に出掛ける。ツアーでは英語グループに入れてくれる様、予め予約の際頼んでいたのであるが、当日は英語圏の団体はいなかったのか、スペイン語オンリーとなった。従ってガイドの案内はチンプンカンプン。初めから全く分からないというのも、或る意味では気が楽である。バックグラウンドミュージックと思えば良いのだから。只、集合時間と場所だけはしっかりと押さえていなければならない。

イグアスの滝は広いので、たっぷり1日行程である。公園の中をガイドの案内で歩くようになっている。入り口から滝まではトロッコ列車が通っている。ナイアガラと同様な滝であるが、滝の落ち口が至るところにあり、広大さから言えばナイアガラより規模が大きくて、山中にある分だけ神秘的である。(看板に依ると、世界で一番落差がある滝はギアナのポタロ滝 226m で、一番水量が多いのはブラジル・パラグアイ国境のセテ・ケダス滝だそうだ。イグアスの滝はナイアガラより水量は少ないが落差は大きい。全体で見ると世界で第5位だそうである)。

ブラジル側のジャングルから流れ出した川が幾筋にもなって樹林を浸し、その水が陥没した崖縁からゴォーと落下している。落ち口の傍まで見物用の橋が掛かっている、飛沫で全身濡れ鼠になる。滝壺は飛沫が雲となって上昇しているので、底は見えない。しぶきの中を鳥が飛び回っていた。イワツバメであろうか。

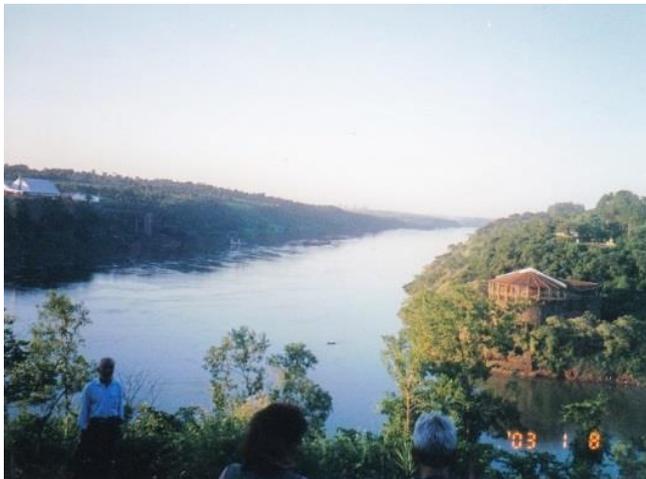


滝壺まで行く遊覧船に乗った。ドでかいエンジン付きのゴムボートで落下する怒濤の下を潜り抜ける仕掛けである。合羽などは無いから、全身ズブ濡れである。パンチョがもっと突っ込めと船頭をおだてるものだから、何回も濁流に突っ込んで行く。乗り物に弱い小生は生きた気がしない。この滝の対岸はブラジルで、ブラジル側にも見物舎が建っているが、橋が無いので渡れない。さすがは熱帯のジャングルで、熱気と湿気が堪らない。若い女性はビキニ姿が多く、目のやり場に困るくらいだ。

観光客は白人が多い。スペイン語が主流のようだったから南米からの団体が多いのだろう。日本人には、パラグアイの日本人学校の先生一家に会っただけだった。実はパラグアイ国境もすぐそこで、我々

が泊まったホテルから 1km も歩けば、アルゼンチン・ブラジル・パラグアイの 3 国の国境であった。アルゼンチン北東端が角のようにブラジルとパラグアイの国境に押し出した部分である。ブラジル東部を源流とするパラナ川がブラジルとパラグアイを分け、角の部分でイグアスの滝から流出するブラジル・アルゼンチン国境のイグアス川が合流している。この川はブエノスアイレスでウルグアイ川と合流し巨大なラ・プラタ川となって大西洋に注いでいる。

3 国の国境は河で隔てられていて橋が無く、パスポートにスタンプを増やすのが趣味のパンチョを残念がらせた。合流点の川岸にはそれぞれの国の展望公園があり、売店やレストランがある。景色が良い。暮れかけた公園でパラグアイに沈む夕陽を見ながら、異国情緒を堪能した。



(河で隔てられた 3 国国境。手前アルゼンチン、右ブラジル、左がパラグアイ。夫々の国の展望台(見張台?)が見える)

(3 国国境のモニュメント)

ホテルの夕食はバイキングで、ピアニストの生演奏を聞きながらセルベッサを痛飲し、多種多様な牛肉料理を我が腹に叩き込んだ。平生は牛肉などは高嶺の花で喰ったこともないから、我が腹はびっくり仰天、下痢するほどであった。

帰途、ブエノスアイレス国内線空港直ぐ傍のラ・プラタ川河口に寄ってみた。全く茶色の泥水の海で、大勢が釣りをしていて。鯉に似た美味そうにない魚が釣れている。魚屋に売って口を糊しているらしい。ラ・プラタ川は飛行機から見ると、下流部分は緑の湿地?を何回も大蛇行して流れていた。河口は幅 40km。ブエノスアイレスの対岸はウルグアイの首都モンテビデオであるが、傍にいた警官にウルグアイの街の灯が見えるかと聞いてみたら、遠すぎて見えないとのことだった。

メンドーサ行の夜行バスにはまだ時間があるので、街に出てみる。サンマルティン広場から下った銀座通りとおぼしき街路(カイェ・フロリダ)にはコロニアル風の建物が並び、賑やかな洒落た通りであった。カフェでセルベッサを呑む。ブエノスアイレスには、メンドーサで慣れていた

“ANDES” 印が無いのでちょっと淋しい。子供や、幼子を抱いた女が金を乞いに来る。子供はあっけらかんで貰えないと分かるとすぐ去るからまだしも、ボロ布に抱いた赤子に今晚食わず金がないと執拗に迫ってくる乞食女は哀れで執拗である。硬貨の 1、2 枚も差し上げれば良いのだろうけれど、それでは今晚の飯は喰えても根本的解決にはならないからと心を鬼にして “No” と言わざるを得ない。これ



が怖いオニイさんだったら、その時の為に隠し持っている10ペソ札10枚を恭しく差し出して、命と交換して貰うのであるが……。(路傍での小遣いねだりの子供はメンドーサでも多い)。メンドーサを出発する時、ブエノスアイレスでは用心するようにと注意されたが、昼間はどうかということも無かった。タクシーも親切だった。帰路も延々14時間のバスでメンドーサに戻った。

【不思議なこと一つ】

この長距離バスで靴を脱いでいたら、車掌がやってきて、靴を履けとノタマッタ。理由を聞きたいが、スペイン語はさっぱりだから要領を得ない。パンチョ曰く、アルゼンチンは紳士の邦であるから、靴を脱ぐような不作法はしてはならない云々。待て待て、小生は飛行機に乗ったらすぐ靴を脱ぐ習慣だが、未だ咎められた覚えはないゾ、たぶんこの車内にはムカデか何か悪い虫がいて、足裏を喰われない様にとの注意ではあるまいか云々。

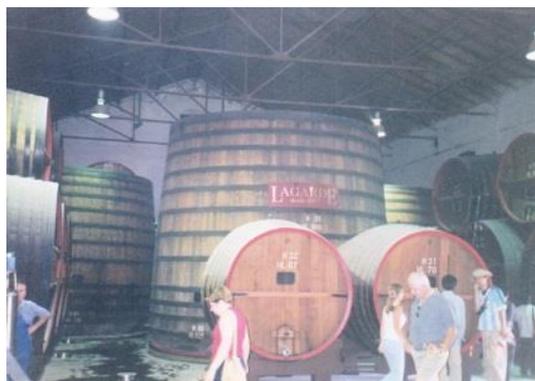
増田農場では、本式のバーベキューをして貰った。こちらではアサードと言ひ、大勢でやる場合には牛1頭を串刺しにして炙るそうだ。豚肉は喰わない。肉やソーセージは安いからどっさりkg単位で買ってくる。ソーセージも豚の血と玉葱を腸に詰めた本格派である(普通のソーセージChorizo<チョリソー>と区別してMorcilla<モルシージャ>と言う)。庭のバーベキュー用の炉で焚き火をし、そのオキで焼く訳である。調味料の使い方二通りがあり、ご主人は岩塩とコショウ、孫のパブロ君は塩味だけの流儀である。肉は骨付きでないと味が出ないそうだ。四阿でワイワイ言いながら食べる味は、なるほどと思わせるものがあった。



(邸内のこの四阿でアサードを食べる)



メンドーサはアルゼンチンワイの8割を生産しているワインの産地でもある。ワイナリー(Bodega という)のツアーがあり、増田さんの家までバスが迎えに来て連れて行って貰った。日本で言えば灘の酒蔵ツアーである。ラ・カソーナ(La Casona)というアルゼンチンレストランにも増田さんに連れて行って貰った。金曜日～日曜日の深夜にはショーがある。漫才、歌謡、タンゴ、ギターのショーがあった。踊りは例の官能的なダンスである。ギターは二人組のギタリストが2時間程連続して弾いたが、『コンドルは飛んで行く』の演奏には強烈な迫力があって、音痴の私でも涙が出るほど感動した。



パンチョはワインをせっせと頂戴した挙げ句、最後のダンスステージでは、タンゴに混じって一人で阿波踊りを踊りまくった程だ。ここは予約制で、スペイン語しか通じないから、我々だけでは如何ともし難がたいところであった。ワイン飲み放題で30ペソ。



(『コンドルは飛んで行く』)



(アルゼンチン・タンゴのショー)

増田農場は自炊であるから、夜はたいていセントロかショッピングモールにバスで飲みに出掛けた。こちらのバスは往復1.2ペソ(スペイン語圏ではコンマとピリオドの表示が逆であるから、“1,2”と書いてある)。ドアを開けっ放しで飛ばすから最初は恐かったが、段々と慣れてきた。レストランやバル(Bar)は夜は21時過ぎでないと開かない。セントロではLas Tinajasというバイキングスタイルのレストランが安くて美味かった。世界料理と称して130種のメニューがあるそうである。何回か行ったが、最初は手当たり次第あれこれ喰っているうちに、美味しいものに行き当たる前に満腹になった。要領を覚えてからは鳥の照り焼き専門に喰わせて頂いた。魚は切り身を目の前で焼いてくれるが、オリーブ油の鉄板焼きだからちょっと馴染めなかった。パンチョは牛肉専門であった。8~12ペソ。誕生日には無料サービスがある。外国人の団体も多い。

ショッピングモールはメンドーサでは一大ショッピングセンターで、スーパーの他各種専門店、高級ブランド店や映画館もある。一番奥に屋内円形広場があって、テイクアウトの食べ物屋が並んでいる。スペイン語は理解できないから、身振り手振りで頼むしかないが、似ても似つかぬ物が出てきたりして、結構楽しめた。店は22時頃にならないと品物が揃わないから、それまでは2階にあるBarのテラスで夕暮れの街を眺めながらセルベッサを飲んだ(21時頃まで明るい)。

メンドーサは治安の良い街で、深夜何処を歩いても危険を感じることは無かった。もっとも、日本人は「歩く金庫」と言われ狙われているようで、我々の山姿は余程乞食のような格好に見えたのかもしれない。

ブエノスアイレスは大都会で、それだけ低所得者も多く、治安も良くないそうであるが、実業家や学者が環境の良いメンドーサに移ってきているので、メンドーサはそれだけ治安が良くなっているとのことだった。信号待ちで停車している車の窓を拭く稼業の人が多。バケツとワイパー一本の商売であるが、一回の稼ぎが10センターボ(1/10ペソ)程度でも、2~3人ぐらいの子供なら何とか養えるそうだ。駐車する車の誘導、駐車した車の監視、駐車した車内を暑熱から守る為のダンボール貸しの商売もあった。野菜やニンニクを一束だけ持って売り歩いている子供も多い。学校の先生の給与が月2~300ペソ、



(セントロ・メンドーサの街角)

これではやっていけないから幾つもの学校を掛け持ちにしている先生も多いらしい。学卒でも職が無く、タクシーやバスの運転手になれば上の口であるという。この国の経済状態を垣間見たような気がするが、やっている人の表情は明るくて屈託が無い。

1月11日夕方、スサーナさんに空港まで送って貰い、メンドーサを後にした。サンティアゴで乗り換え深夜ペルー・リマのホルヘ・チャベス国際空港に到着。想像以上に大きくて近代的な空港であった。入国手続きを済ませて、重い荷物3ヶを引きずりながらゲートを出ると、タクシーの運チャンの波がワートと押し寄せて来た。物の本に書いてあるとおりの光景である。我々はインターネットでホテル予約と同時に迎車も頼んでいたし、予約の返信には、我々の名前を書いたプラカードを運転手に持たせると書いてあったから、鷹揚に構えていたが、一向にそれらしき人物は見当たらない。キョロキョロと見回しているうちに、日系人らしき人から英語で声を掛けられた。何処へ行くのか、ホテルは決まっているのかと聞いてきた。物の本では、この空港は雲助ばかりだから用心しなければならないと警告していたから、てっきりこの種の手合いかと警戒の色を強めたが、どうも彼は現地の旅行社の社員であって、親切心からたった二人の日本人に声を掛けてくれたようだ。人を疑う事の恥ずかしさを痛感させられた。心すべきことである。

彼は、我々が予約したホテルに早速電話してくれた。どうもホテル側が迎えの車を手配し忘れていたのか、その辺に客待ちしていた車を急遽携帯電話で振り向けたようであったが、さっぱり土地勘が無い我々には救いの神であったというべきだろう。外国のホテルは日本と違って、2ヶ月も前にデポジットも払わず(払う方法も無かったが)単にインターネットで予約した予約がちゃんとブッキングされているかどうかも怪しいのであって、前日メンドーサから入れておいた reconfirm のメールをチェックしている保障も無いのである。

空港から一步離れると、寂しげな街並みとなった。深夜であるが、うらさびれたビルの陰には得体の知れないような連中が屯していた。大通りであるが、街全体が廃墟と化しているようでもある。サンマルティン広場に面したホテル(Hostal San Martín)は、上記のようなことにもかかわらず、丁寧な対応で、この辺りは治安が相当悪いからと、玄関まで出迎えてくれた。日系人の経営であるが、日本語は全く駄目、英語も片言であったが、深夜にもかかわらず荷物を運んだりして親切にしてくれた。人の良さそうなおニイさんであったが、腰を振る手つきをしながら、若い女はどうかと言っているようだ。どうも日本人はソノ方面を要求するものだと思い込んでサービスに勤めてくれているらしいが、断るのに往生した。タバコが買いたいと言ったら、外の露天で売っているが、外国人にはボルから私が買ってきてあげると優しい。

飯を求めに隣の鶏料理の Bar に行く。この辺りはサンマルティン広場であるから、道端に目付きの悪いオアニイさんが屯していてチョット怖い。幸いツアーリスト・ポリス(Policia de Turismo)なる旅行者の安全を任務としている警官が店の入り口に立っていたから、危険を感じるようなことは無かった。この警官は英語が話せて、テイクアウトして早くホテルに帰った方が良くと忠告してくれたり、店員にスペイン語で通訳してくれたから大助かりだった。

ペルーに旅したことがあるパンチョによると、この店はペルーで全国展開している日系の有名な鶏屋のチェーン店であるそうだ。名を Norky's という。恐いアオニイさんの傍を恐る恐るすり抜けてホテルに帰り、冷蔵庫にあるセルベッサで深夜の夕食を摂る。“クスケーニャ”(クスコのビール)という銘柄で、クスコに行ったことがある相棒は懐かしげにラ



(ホテルからサンマルティン広場を望む)

ベルに見入っていた。

このホテルは設備は古いが、こざっぱりしていて感じが良い。部屋数は5ツぐらいであろうか。商人宿風。この夜の泊まりは我々だけであったようだ。狭いがサンマルティン広場を見下ろすベランダもある。翌朝、我々は一泊しかないから夕方の出発迄荷物を廊下の隅にでも置かせてくれと頼んだら、遠慮なく部屋に置いて良いと言ってくれた。

久しぶりにまともな朝食をと、コンティネンタルのルームサービスを頼んだ。目玉焼きの追加をしたが、なかなか通じず、絵を描いたら OK だった。皿の内容はともかく、由緒ありげな年代物の木製ワゴンときちんとアイロンがかかったテーブルクロスで運んできたのは、未だにコロニアルの伝統が残っているのであろうか。

流しのタクシーは危険だからとホテルまで呼んでくれたタクシーで国立人類学考古学歴史博物館に行く。本当はナスカの地上絵を見たかったが、自称ペルー通の相棒の話ではナスカへはクスコ経由で2泊必要だそうだから、今晚NYへ出発する我々には、とてもそんな時間は無い。

このタクシーにはメーターが無い。我々は2桁以上の数字は言われても分からないから、タクシー代を紙に書いて貰う。この博物館は主にインカ時代の土器や埋葬様式(ミイラ)を展示している。土器文様に表された当時の人々の表現能力の多様性には驚かざるを得ない。“性”という属性だけを端的に表現した土偶もあった。惜しむらくは、説明パネルがスペイン語しかないからサッパリチンプンであった。



(博物館前)



(展示されていたミイラ)

昔、中学校の社会科か何かの教科書に載っていた脳手術の跡や頭蓋変形の骸骨が多数展示されていて、パンチョは「ガイコツばかり、見たくもないや」と外でタバコ・タイムばかりだ。中庭の茶店でセルベッサを飲む。

ガイドブックによると日本大使館の近くに日秘文化会館なるものがあり、冷や奴定食もあると書いてあったから、帰路ブラブラと歩いて探しに行った。日本大使館を探して歩き回ったが、全く分からぬ。その辺の人に聞くと、あの辺りだというのが全くそれらしき建物



(博物館の庭で瞑想に耽るパンチョ)

も無いし看板も無い。この辺りだろうと何回もグルグル廻り歩いた末、警察犬を連れて来たおまわりが居たから聞いてみたら、すぐ其処だと連れて行ってくれた。国旗の掲揚もなく看板も無い。良く見ると、監視カメラが屋根から監視し、監視楼もあり、鉄条網を張りめぐらした塀で高く閉ざされた建物であった。この警察犬を連れて来た警官もきっと大使館警備をしているのであろう。門も固く閉ざされて近づくこともできなかった。

それもその筈である。何年か前に起きたペルー大使館襲撃事件の後遺症であろう。今の場所は新しく移転しているが・・・。それにしても、国旗も掲揚できず、現地の警官にガードされて大使館員の出入りも自由にならない大使館なぞという存在はおかしなものである。当時のフジモリ大統領は地下壕を掘らせて強行突破して人質を救助したが、日本人には死者が出なかったものの、ペルー人には犠牲者が出た。失政という理由で大統領職を解任され、日本へ逃亡している大統領の故地の日本人旅行者に対して、ここを警備させられているペルーの警官はどんな気持ちでいるのであろうか。

そのような訳で、日秘文化会館なるものもどこにあるのか分からず、冷や奴定食にはありつけなかった。リマの交通手段は、乗合バスと乗合タクシーを足して二で割ったようなコレクティーボというマイクロバスがポピュラーである。客の要求に応じて行き先も臨機応変であるらしい。ただ、決まった停留所などもなく、また行き先表示もなく、屋根に乗ったお兄さんが行き先か何かを叫んで廻っているだけである。走っている詰め込み相乗りタクシーと思えば良い。我々もこれを利用すればホテルにも直ぐ帰れるのであろうが、何様行く先も分からないからどうにもならない。結局、テクテクと歩いて帰った。10km くらいは歩いたであろうか。

途中にはグラウ広場という大きな公園があり、週末の夕暮れを楽しむ家族連れや恋人で賑わっていた。路地の露天のタバコ屋では一本つつバラ売りをしていた。リマはアルゼンチンに比べてタバコの値段は更に高く 10 ドルもする。帰り着いたサンマルティン広場は、何かのデモで騒然としていた。聞けば週末はいつもことであるらしい。犬を連れた警官が野次馬を追い払っている。



(リマの街角)

ホテル 1 階のレストランでちょっと一杯やって迎える車で空港に向かう。ここの空港は、チェックが厳重で荷物は全て開けさせられた。深夜の猛暑の空港で分からないスペイン語の質問に悪戦苦闘。うっかりしてポケットに入れていた爪切りも引っかけた。ヤスリが凶器になるそうで、ヤスリだけ折り取られて本体は返してくれた。やっと開放されて南米特有の SecureBaggage (青いビニールフィルムでチェック済みの baggage をぐるぐる巻きにしてバッグの中身を盗難から防ぐサービス) を受ける。

やれやれと、出国ゲートを通ろうとしてハタと困った。パンチョはドルの半分は T/C で持参していたから、アルゼンチンでキャッシュがなくなり、小生のキャッシュも彼に貸していたので、US に帰ればいくらでも T/C が両替できるからと、各自ここの出国税 10 ドル程度を残して後はきれいにスッカランとなっていた。ところが、なんと出国税は 30 ドルだという。二人のあらゆるポケットを掻き回してみても、全く足りない。オイオイ、弱ったな、飛行機に乗れないゾ!! リマから NY まで新規に運賃を払わされるのも大変だッ、それに空席があるかどうか分からない。

アッ、しめたア、聞けば空港内の銀行がまだ開いているではないか。奴の T/C をキャッシュに替えて貰ってやっと出国税を払うことができた。サンティアゴ始発 NY 行の飛行機が随分遅れて到着し、ここを飛び立ったのは夜中の 2 時を廻っていた。ケビンを掃除する暇もないから座席は前の人が座っていたそのままで汚いことこの上ない。機内食はちゃんと積んだだろうナ。やれやれ。

NY まで 8 時間。朝 JFK に到着。早速ターミナルの外にタバコを吸いに出る。NY は冷凍庫で、熱帯から来た者には寒くて堪らない。ブルブル震えた。Baggage room に重い荷物を預けて身軽になりマンハッタンのホテルに向かう。ホテルは目抜き通りの Madison Square Garden 傍の The New Yorker。古い安宿であるが 1000 室もある大ホテル。むさい男二人の滞在には充分である。Penn. station のすぐ傍に建っていて、何処に行くにも便利なのが良い。

到着した日は、取り敢えずセントラルパークへ。樹木はすっかり葉を落とし、池は凍っていて、寒々

しい。犬を連れて人が僅かに歩いているだけで全く人影がない。

6年前にNYに来た時にはここには来ていないから、30年振りであった。翌日はエンパイアステートビルの展望台からNY散歩を開始した。高層ビルが増えたからもう展望台ツアーも無いかと思ったら、ちゃんとあった。ここも30年振りである。30年前は確か入場料が1ドル程度であったと記憶しているが、今は10ドルになっていた。NYが初めてのパンチョは寒風吹きすさぶ屋上展望台から四周を飽かず眺め下して、「イッヒッヒ、NYの地理なら何でも俺に聞いてくれと」豪語したものである。

地上430mの尖塔部は、当時の飛行船を繋ぎ留めるために作った塔だそうで、飛行船から縄梯子を下ろしてこのビル屋上に降り立つ趣向であったというからその発想にはただただ驚くばかりである。(一体、430mの高空から縄梯子にぶら下がって降りる勇気がある人がいるだろうか)。

タクシーでバッテリーパーク近くのグラウンド・ゼロ(昨年夏、二機の旅客機が突っ込むというテロで倒壊したWorld Trade Center跡地)を見に行く。未だ通行も制限されていて、現場には近づけないが、事件当時のTVにもよく映った向かいの教会の塀には今でも献花や当時掛けられたT-shirts、ポスターなどがそのまま色褪せて残っていた。犠牲になった膨大な人々の名前を刻んだ慰霊碑もある。



(教会の壁に掛けられたTシャツ)

帰りは地下鉄に乗った。切符の自動販売機には日本語や中国語の表示もあった。車内も安全である。帰途、空港バスの乗り場を確認しがてらGrand Central Stationに寄った。2階にUA航空の事務所があったから明日の成田への帰りの便を確認しようと、カウンターの老嬢に声を掛けた。彼女はパンチョを一目みるなり、この男何処から湧いてきたのか、ひょっとしたら地獄から舞い戻ってきたのではあるまいかというような顔をして相棒を見ている。この真冬の冷凍庫のようなNYで、シャツ一枚の薄着でしかも乞食のような格好をしているのだから驚くのも無理はない。彼は防寒衣は空港に預けた荷物に入っているの着る物が無いのである。

“We are from Argentina where it's in midsummer now”と言ったらやっと納得顔になった。それからしげしげと彼のオツムを眺め廻し、何やらゴソゴソとバッグを掻き回して毛糸の帽子を取り出した。耳覆いのある暖かそうな帽子である。私は二つ帽子を持っているから、これを被って少しは暖かくしなさいと言う。アメリカの老嬢は親切である。固辞する彼に代わって、小生が有り難く頂戴した。(帰国後は、夫婦で庭師をやっている息子の嫁に所有権を移転させて頂いた)。

夜、NYにいる友人(富士電機アメリカ社長)に日本食のご馳走になった。1ヶ月振りの刺身は美味かった。そういえばアルゼンチンでは魚類は少なく、魚は日本を出発して以来この1ヶ月間、口にしていなかった。ホテルに戻り、すっかりイビキを掻いている相棒を残して、寝酒をとビールを買いに出るが、方向音痴のために昨日行った酒屋が全然わからぬ。ホテルの裏通りには酒も売っているカフェがあるのは分かっているのだが、ここは深夜は物騒だ。そのうち全くlost positionになってきた。何やら暗くて怪しい路地に入り込んでしまったか。やっとのことでホテルに戻り、ロビー横のBarの止まり木で独りで一献傾ける。一献、二献、三献、四献。そのうち隣の椅子に可愛いネエちゃんが来て座ったので、片言のアバンチュールを楽しんだ。

翌早朝まだ暗い時刻にPenn. Station前の交差点で空港行きのバス(Grand Central駅で乗り換え)を待つが寒くてどうしようもない。そのうち朝日が34th. St.の端から昇ってきて、エンパイアステートビルを黒いシルエットに染めてきた。こうして見るとやはりマンハッタンは摩天楼である。

NYから成田まで1万2千キロ、ウンザリするほど長い14時間のフライトを終えて、33日間に亘る南

米の旅は終わった。本来アコンカグア登山紀行であるべき本稿の紙幅の半分が、下界の漫遊紀行に化けざるを得ない結果に終わったことは、返す返すも残念でならない。ボチボチと高度順応活動を国内外の山で重ねて、近い将来必ず再度挑戦したい。
(2003年2月記)



(お世話になった増田さんご一家と)

(左から、パンチョ、一人おいて奥様、孫のパブロ君、ご主人、娘のスサーナさん、小生)

[⇒「遙かな山々 私の山旅・海外編」目次に戻る](#)